

「海と山の森づくり～循環する社会を目指した取組み～」

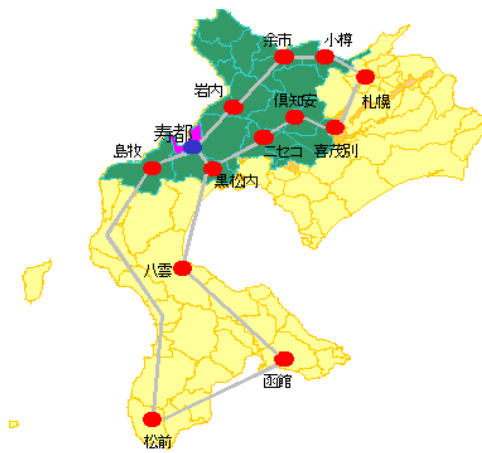
寿都町役場産業振興課 土開 直樹

1. 寿都町の概要

寿都町の位置は北海道の日本海に面し、札幌市と函館市のほぼ中間に位置しており、人口が約 3,500 人の漁業を基幹産業とし、かつてはニシン漁で栄えた町で、特産品として春は前浜での小女子漁ではじまり、その小女子を生そのまま炊き上げた『生たきしらす佃煮』は多くの消費者に喜ばれております。また、5～6 月が旬の『寿カキ』、夏は、ウニ・ナマコ、秋は、ホッケ漁が盛んで本町の総水揚の約 7 割をほこり、冬は、アンコウ・アワビ・毛ガニと四季折々にバラエティーに富んだ水産物が水揚げされているまちです。

また、最もニシン漁で栄えた明治時代の人口は 2 万～3 万人いたと言われており、かなり大量の樹木が燃料や建材として森林から切り出されていたことが推測され、伐採跡地は畑などとして利用されていたようで、天然更新が行なわれた箇所も見受けられますが、強風地帯ということもあり、天然更新が行なわれずにササ地となっている箇所が多数見受けられます。

しかしながら、人間がなかなか入らない俊敏な沢沿いには立派なミズナラやブナが存在しています。



図



写真 1

2. 寿都町の取組み事例

(1) 海の森づくり

ニシン漁最盛期のときに木を切りすぎたのか、道路がアスファルトになり山からの栄養が途絶えてしまったのかわかりませんが、日本海沿岸で深刻な問題となっている磯焼けですが、本町も同じように磯焼けに悩んでいるまちです。

この磯焼け対策として、平成 19 年度より、海に本来山から来るべき栄養素を畑に入れる肥料と同様に海に入れることで元々あった豊かな海中林を復元しようとする取組みを行なっています。



写真 2

海に肥料を投入することにより、翌春には、豊かな海中林を復元することが出来ましたが、所詮は人間がすることなので、長い間効果を持続することは出来ません。

何年かおきに肥料を入れ替えなければ、海中林に栄養がいきわたらずに元の磯焼けの状況に戻ってしまうため、山の森づくりと並行して行なっていく必要があります。

(2) 山の森づくり

そこで、本来の森を取り戻そうと海の森づくりと並行して町内の漁業者が中心となり、平成 19 年度より植樹活動も行なっており、植樹活動では、後志森林管理局、後志総合振興局、南しりべし森林組合に野ねずみの防除方法の指導や、植樹方法の指導という点で協力をいただいております。

①『寿都の海を豊かにする植樹祭』

本町でカキ養殖をしている漁業者が中心となって、カキを育てるためには豊かな森からの栄養素が必要だということで、植樹活動を行なっており、現在は、カキの養殖者以外の漁業者へも裾野を広げており、参加した方々はササの根がはり固くなった土を掘っての植樹という重労働にもかかわらず、一生懸命に作業をしており、終わった後は、非常に満足されて帰られているようでした



写真 3

②『つながりの森植樹祭』

平成 22 年の 9 月には、横浜国立大学名誉教授の宮脇昭氏を招いて「つながりの森植樹祭」を開催しており、植樹前に植樹する樹種の説明を黒松内町、島牧村、寿都町の南後志の 3 町村の町村長はもとより、後志森林管理署の署長さんにもご協力をいただきました。

また、今回は今までの植樹と大きく違って、親子や女性の参加が特に大きく増えており、今までは、5%程度であった参加率も大幅に延び、20%程度まで伸びました。

植樹方法も今までの植樹方法とは大幅に異なり、硬い土をスコップで掘り起こして行なう植樹方法とは違い、植樹地を畑のように耕し移植ごてで行なう植樹は、こどもはもちろんのこと女性にも大変好評で、「植樹のイメージが変わった。」「このような植樹なら又参加したい。」などの声が挙がっていました。



写真 4



写真 5

(3) 人づくり

平成 22 年度に林野庁の補助金で、「こどもふれあいセンター」が建設され、木育にも注目が集まり様々な取組みが行なわれるようになりました。

① 保育園での木育

『こどもふれあいセンター』のオープンに併せて、行ないました取組みの一つ目として、後志森林管理署、森林総合研究所北海道支所、後志総合振興局森林室の協力を得て保育園で行なった木育ですが、ブナの間伐材を使って年輪を数えたり、後志総合振興局森林室による『森のどうぶつ』という紙芝居、そして北海道の森林づくりマスコットの『芽森（めもりー）』との記念撮影を行い、最後に後志森林管理局と森林総合研究所北海道支所の指導で、町内の国有林内で採取されたブナの種まきを行ないました。

このブナの苗木は現在も『こどもふれあいセンター』ですくすくと成長しており、成長具合をみてこどもふれあいセンター周辺に植樹する予定です。

② ミズナラ巨木見学会

続いて、本町の国有林内にあるシンボルツリーのミズナラの巨木見学会ですが、後志森林管理署、後志総合振興局森林室の協力を得て町内の小学生を対象として開催しました。

参加した子ども達は、ミズナラの巨木の前に立つと口をあんぐりと開け見上げている子供がいるほどインパクトがあったようです。

後志森林管理局の森林官の方の説明のあとで、直接樹に触れているところを見てもこの樹の持つ存在感が伝わるのではないかと思います。

また、この後には、後志総合振興局森林室で樹木〇×クイズなども行ない、その後雪上で昼食をとりました。

参加した子ども達は、普段なかなかできない体験が出来たのではないかと思います。



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9

③『こどもふれあいセンター』オープン記念事業

木育の第一人者である煙山泰子氏を招いて、林野庁の補助金で建設された『こどもふれあいセンター』オープンに併せて、町内の幼児・小中学生とその父母を対象として、講演会と木のマグネット作りを行いました。

様々な木のおもちゃや、楽器などを使った講演会は大人も子供も飽きることなく皆さん興味深げに聞き入っていました。

また、2種類の木を使ったマグネット作りでは子ども達はもちろんですが、意外なことに、参加されたおじさんたちに大好評で、こだわりは子ども達以上かもしれません。

このような年代の方々が今後、木育の指導者として子ども達と一緒に森で遊んだり、木工を楽しみながら指導して本町の木育の中心となっていればと期待しています。



写真 1 0



写真 1 1

3. 活動のまとめ

①海の森づくり

肥料を海に投入することにより、海中林の復元ができ、効果があることが実証されたが、今後植樹活動とともに並行して継続することにより、より一層豊かな海になっていくことが期待されます。

②山の森づくり

今まで植樹活動を継続してきたことにより、漁業者に植樹活動が浸透してきており、海の森づくりとともに継続して行い、息の長い活動を行なっていく必要があります。

また、女性や子ども達も参加しやすい植樹活動を実施して、町民一人一人が思い入れのある森づくりを行なっていく必要があります。

③人づくり

未来を担う子ども達へ寿都町の豊かな自然環境をつなげていく活動を行なうための中心となる人物の育成が必要になるように思われます。

また、『こどもふれあいセンター』を関係機関とともに協力し、より充実した木育活動を行なうことでより魅力ある施設にしていく必要があります。

4. おわりに

今まで点であった取組みが、現在つながりをみせており線となってきました。

今後は、この線が輪となっていくのではないかと期待しております。

また、寿都町の循環する社会を目指した取組みとは、“田舎”だからこそできる人と人、人と自然、自然と自然のつながりを最大限活用し、未来を担う子ども達へと寿都町の豊かな自然を循環させる（つなげる）取組みで、この様な循環する社会の構築を目指し今後も様々な取組みを行なっていきます。